研究プロジェクト活動報告

１．舞踊の動作分節と指導言語に関する研究会

①趣旨：「舞踊の動作分節と指導言語」に焦点を当てて、日本の民俗芸能およびアジアの民族舞踊（民俗舞踊）の身体表現の分析法について検討する。

②プロジェクト担当者（センター研究委員）：中村美奈子

③客員研究員：

八村広三郎（立命館大学情報理工学部・教授）
廣田律子（神奈川大学経営学部・教授）
海賀孝明（わらび座デジタルアートファクトリー・研究員）
小島一成（神奈川工科大学情報学部・助教授）
藤田隆則（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター・助教授）
木村はるみ(山梨大学教育人間科学部・助教授）
波照間永子（群馬県立女子大学文学部・講師）

研究協力員：

池田宏子（本学大学院人間文化研究科・博士前期課程２年）

④活動経過：

研究代表者は、平成17年度の国際日本学シンポジウムで「無形文化財のドキュメンテーションとデジタルアーカイヴ」と題した２つのセッション（テクニカルセッションとパネルセッション）を担当した。

平成18年度は、前年度のシンポジウムメンバーに新たなメンバーを加え、日本の民俗芸能およびアジアの民族舞踊（民俗舞踊）の身体表現の「具体的な」分析法について、「舞踊の動作分節と指導言語」に焦点を当てた研究プロジェクトを立ち上げ、研究会を開催した。

第１回　舞踊の動作分節と指導言語に関する研究会

日時：７月１日（土）午前10時半～12時半
場所：お茶の水女子大学文教育学部２号館３階308室

研究発表：

題目「岩手県岩崎鬼剣舞の「采（ザイ）切り」の動作特性－モーションキャプチャによる動作計測と舞踊の指導言語の分析を手がかりとして」

発表者：池田宏子（お茶の水女子大学大学院人間文化研究科・博士前期課程２年）

内容：昨年度の国際日本学シンポジウム「無形文化財のドキュメンテーションとデジタルアーカイヴ」のテクニカルセッションにおいて計測した岩手県岩崎 鬼剣舞の庭元と初心者のモーションキャプチャデータを、現地で行われている 指導法（口唱歌）を手がかりに分析する。

出席者（順不同）

＜研究会メンバー＞

中村美奈子　お茶の水女子大学
池田宏子（お茶の水女子大学・院生）
小島一成（神奈川工科大学）
海賀孝明（わらび座，Digital Art Factory）
廣田律子（神奈川大学）
波照間永子（群馬県立女子大学）

＜メンバー以外＞

湯川崇（秋田経済法科大学教養部）
渡部信一（東北大学大学院教育情報学研究部）
長瀬一男（わらび座）
北川知美（お茶の水女子大学・院生）

2．近現代日本文学におけるフランス文学の受容の様相

①趣旨：明治期以降において、日本の文学者たちが、どのようにフランス文学を受容し、改変し、また新たな自己の作品創造の糧としたかを考察する。

②プロジェクト担当者（センター研究委員）：中村俊直（文教育学部言語文化学科）

③学内研究員：

中村弓子（文教育学部言語文化学科）

村田眞弓（文教育学部言語文化学科）

客員研究員：

金子美都子（聖心女子大学教授）

有田英也（成城大学教授）

岩切正一郎（国際基督教大学準教授）

④活動経過：

２、３ヶ月に一度の割合で研究会を持った。さらに中村弓子が主任指導教員として、博士後期課程所属の学生の西岡亜紀を指導し、西岡は「福永武彦におけるボードレール」というテーマで論文を完成させ、博士の学位を取得した。この審査には中村俊直と村田眞弓も加わった。また、岩切正一郎は、自己の専門の研究対象がボードレールであるので、西岡に対しその論文執筆過程において、何度か有意義な助言を行った。

3．アジアにおける仏教および儒教思想にかんする比較日本学的研究

①趣旨：アジアにおいて、仏教や儒教が、思想およびイデオロギーとしてどのように機能していたかを具体的実証的に検証し、その比較思想史的意味を理論的に解明する。

②プロジェクト担当者（センター研究委員）：高島元洋・頼住光子

③学内研究員：

羽入佐和子

客員研究員（学外の大学教員など）：

窪田高明（神田外語大学教授・日本研究所所長）

徐翔生（台湾・国立政治大学専任助教授）

長野美香（聖心女子大学専任講師）

松下みどり（相模女子大学非常勤講師）

中本梅衣（暢素梅）（法政大学非常勤講師）

大久保紀子（本学非常勤講師）

④活動経過：

４月以降、月に２ないし４回のペースで研究会を開いている。主な出席者は、大久保紀子、長野美香、中本梅衣（暢素梅）である。稲葉黙斎『先達遺事』『墨水一滴』の注釈作業を中心にして、本書の記事から江戸後期の儒学が具体的にどのようなものであったかを考察する。

刊行物

<u>高島元洋</u>

・「「人間存在の二重構造」（和辻哲郎）と「仏向上」（道元）―「人間とは何か」（存在）をめぐる予備的考察」（『時間論をてがかりとした道元の思想構造の総合的研究』pp.79-85、平成15年度～平成17年度・科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書・研究課題番号15520010・研究代表者・佐藤（頼住）光子、2006年）

・「日本思想の可能性について―倫理学と倫理思想史（*Les potentialites de la pensee japonaise : ethique et histoire de la morale Tradui par Julien FAURY*）」（『お茶の水女子大学「魅力ある大学院教育」イニシアティブ〈対話と深化〉の次世代女性リーダーの育成　平成17年度　活動報告書　シンポジウム編』、pp.122-127、仏語訳pp.279-286、2006年）

・「未来を拓く主体性の育成と人間としての在り方生き方に関する教育」（『中等教育資料』第846号、ぎょうせい、pp.14-17、2006年）

<u>頼住光子</u>

・「宗教と倫理をめぐる一考察―道元の二つの因果観をてがかりとして―」（文部省科学研究費研究成果報告書「時間論をてがかりとした道元の思想構造の総合的研究」研究課題番号15520010　平

成15～17年度科学研究費補助金　基盤研究（C）(2) 研究代表者：頼住光子　研究成果報告書、平成18年３月　pp.1-11）

・「道元と親鸞における『悪』の問題をめぐって―比較思想的試論―」（前掲報告書、pp.13-19）

・“A Study of a position of ethics in Japanese Mahayana Buddhism”（前掲報告書、pp.41-43）

・「仏教と日本人の道徳教育に関する一考察」（前掲報告書、pp.45-68）

・「思想史の中の飛天」（前掲報告書、pp.69-78）

・「道元の思想構造」（魅力ある大学院イニシアティブ『＜対話＞と＜深化＞の次世代女性リーダーの育成』平成17年度活動報告書シンポジウム編　お茶の水女子大学大学院人間文化研究科　2006年11月１日　pp.128-32、フランス語訳“La Structure de la Pensee de Dogen”pp.287-291）

・「親鸞の仏性思想について――その源流と展開」（お茶の水女子大学『人文学研究』第三巻、掲載予定、2007年３月発行予定）

・「親鸞における「自己」と「他力」―その連続性と非連続性をめぐって―（京都フォーラム報告書掲載予定）

・道元の仏性論――「仏性」思想展開の観点から（日本仏教総合研究学会『日本仏教総合研究』第５号掲載予定）

<u>大久保紀子</u>

・「本居宣長における神の概念」（『お茶の水女子大学「魅力ある大学院教育」イニシアティブ〈対話と深化〉の次世代女性リーダーの育成　平成17年度活動報告書　シンポジウム編』、p.133-p.138、2006年）

・「本居宣長の神道思想の特質について」（お茶の水女子大学『人文学研究』第三巻、掲載予定、2007年３月発行予定）

４．欧米における日本学――日本美術研究を中心に――

①趣旨：欧米における日本美術研究に関する方法論の分析的考察を行う。欧米の研究者あるいは芸術家がどのように日本の美術を解釈してきたかを明らかにしながら、彼らの残した言説（内容、文化的背景、方法論）を分析し、日本国内での研究と比較しながら検討し、その特質を捉える。

②プロジェクト担当者（センター研究委員）：ロール・シュワルツ・アレナレス

③学内研究員：

秋山光文（文教育学部人文科学科学部教授）

客員協力員（学外の大学教員など）：

馬渕明子（日本女子大学）

山梨絵美子（東京文化財研究所）

クリストフ・マルケ（フランス国立極東学院東京支部代表・フランス国立東洋言語文化研究所教授）

ジャン＝ノエル・ロベール（フランス国立高等研究院）

ニコラ・フィエヴェ（フランス国立科学研究庁 (CNRS) 中国日本チベット文明研究センター副所長）

ヴェロニク・ベランジェ（フランス国立図書館東洋写本部学芸員）

④活動経過：

〔平成17年度〕

１）お茶の水女子大学比較日本学研究センター第８回国際日本学シンポジウム

公開講演会　：パトリシア・フィスタ　（国際日本文化研究センター助教授）

［京都・奈良の尼門跡と皇女尼僧の美の営み］（2006年７月９日）

企画・コーディネイト・司会：ロール・シュワルツ・アレナレス

セッションⅡ「都市の芸術的記憶とアイデ

ンティティー」(2006年7月9日)
企画・コーディネイト・司会：ロール・シュワルツ・アレナレス
発表者：
ニコラ・フィエヴェ（フランス国立科学研究庁 (CNRS) 中国日本チベット文明研究センター副所長）
「ヨーロッパと日本の都市における建築文化財の保存についての考察」
廣川暁生（お茶の水女子大学日本学術振興会特別研究員）
「16世紀フランドル美術における都市の表象―アントワープの場合―」
ヴェロニク・ベランジェ（フランス国立図書館東洋写本室日本部門図書館員）
「エメ・アンベールの『絵で見る日本』(1870年）に見られる江戸の町の表象」
〔平成18年度〕
2）お茶の水女子大学比較日本学研究センター第1回公開講演会（2006年9月8日）
ダニエル・ストリューヴ（パリ第7大学国文学研究資料館　外国人研究員）
「西鶴と『徒然草』」
司会：ロール・シュワルツ・アレナレス
3）町田市立博物館見学　ベルナール・フランクコレクションのお札コレクション調査(2006年10月19日)
4）東京芸術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻　研究室見学・作品調査（2007年1月25日）

5．グローバル時代の総合的日本語教育

①趣旨：グローバル時代にふさわしい総合的な日本語教育を模索する。日本学との学際的連携や文化理解教育のあり方、IT利用などについても考察する。
②プロジェクト担当者：
森山新（センター研究委員）
③学内研究員：
ナイダン・バヤルマー（モンゴル教育大学講師、言語文化学専攻大学院生）
学内協力員：
王冲（国際日本学専攻大学院生）
林美琪（国際日本学専攻大学院生）
チュオン・トゥイ・ラン（言語文化学専攻大学院生）
客員研究員：
李徳奉（韓国・同徳女子大学校教授）
徐一平（中国・北京日本学研究センター主任）
許夏珮（台湾・東呉大学助理教授）
河先俊子（フェリス女学院講師）
研究協力員：
平畑奈美（中国帰国者定着促進センター講師）
④活動経過：
5月12日　同徳女子大学（韓国）とのジョイント授業報告
場所：人間文化研究科棟6階大会議室
報告者：森山新、高橋薫（お茶の水女子大学大学院博士後期課程大学院生）
7月18日　第9回定例研究会
テーマ：グローバル時代に求められる日本語教師とは
発表者：平畑奈美（早稲田大学大学院生）
場所：共通講義棟1号館204号室
9月11日～16日　北京日本学研究センターとのジョイント教育
場所：北京日本学研究センター
講演1
テーマ：認知言語学と日本語教育－応用認知言語学の可能性－
講師：森山新（お茶の水女子大学）
講演2
テーマ：小さな留学生への学習支援
講師：朱桂栄（北京日本学研究センター講師）
講演3（日本学総合講座第1回講演）

テーマ：総合的日本語教育と認知言語学
講師：森山新（お茶の水女子大学）
本学からの研究発表
峯布由紀「言語処理の発達からみた日本語学習者のテンス・アスペクトの習得」
橋本ゆかり「テイル用法の普遍的習得順序について」
白以然「プロトタイプ理論を用いた多義語分析と語彙習得」
王冲「認知言語学的観点を取り入れた日本語陳述副詞の意味と習得に関する研究」
小浦方理恵「多義動詞「たつ」の多義構造」
石井佐智子「多義語・言い切りの「た」の習得研究」
北京日本学研究センター大学院生による研究発表（略）
12月15日～17日　国際日本学コンソーシアム国際ジョイントゼミ（日本語教育・日本語学）
大学院生による研究発表
星野祐子（本学）「日本語相談談話の談話分析」
林科成（台湾大）「認知言語学から見た「手」に関する一考察」
孫愛維（本学）「第二言語および外国語としての日本語学習者における非現場指示用法の習得」
楊虹（本学）「中日接触場面のグループ討論における成員の参加のし方」
金賢熙（同徳女子大）「韓国の聾学校における日本語教育の実態と課題」
申恩浄（本学）「日本語学習者の個別性の働き－心理類型要因を中心に－」
趙蓉（本学）「日本語のニ格についての研究－中国語との対照を兼ねて－」
12月17日　第３回公開講演会
場所：理学部３号館701号室
テーマ：異文化理解教育と交流
講師：李徳奉（同徳女子大学校教授）
１月23日　第４回公開講演会
場所：文教育学部１号館第一会議室
テーマ：多文化共生社会のための多言語コーパス開発と研究利用―中国の日本学研究と教育の現状報告を兼ねて―
講師：曹大峰（北京日本学研究センター副主任）

６．文化交流プログラムとしての日韓比較女性史研究

①趣旨：日本・韓国の女性史の比較を通して、相互の歴史認識を理解し、植民地主義における加害―被害の関係性をこえた、女性同士の連帯の可能性をさぐる。
②プロジェクト担当者（センター研究委員）：菅聡子
③学内協力員：
李南錦（博士後期課程・国際日本学）
金ミンジュ（同上）
客員研究員：
金恩実（梨花女子大学教授）
④活動経過：
国際シンポジウム「歴史・国家・女性―韓日比較女性史のための試み」（2006年７月24日・25日、於：梨花女子大学）
詳細：
７月24日
▽Session１　近代国家・女性知識人・女性表現
金　恩實（梨花女子大学女性学科教授）「新女性の性差化された主体性から再現される「新」の意味に関する研究：羅蕙錫を中心に」
菅　聡子（お茶の水女子大学）「樋口一葉と明治日本―女性作家が見た〈近代〉―」
金ミンジュ（お茶の水女子大学大学院博士後期課程）「『青鞜』とその時代―女性の国民国家への統合と逸脱」

権金炫怜（梨花女子大学大学院博士後期課程）「なぜ柳寛順(ユ・グァンスン)はお化けになったのか。―剥製になった女性英雄、柳寛順―」

▽Session 2　〈国母〉のイメージをめぐって

権幸佳（弘益大学）「明成皇后と国母の表象」

若桑みどり（千葉大学名誉教授）「明治天皇の皇后美子（昭憲皇太后）の表象」

▽Session 3　女性の移動・旅行―Trans-Local、Trans-National

林香里（東京大学）「日本における「韓流ブーム」の限界―マスメディア・システムにおける女性オーディエンスの問題―」

楊智景（お茶の水女子大学大学院博士後期課程）「女性作家の帝国フロンティア・台湾への行進――一九三〇年「婦人文化講演会」を中心に」

平田由紀江（延世大学大学院博士後期課程）「日本における韓国大衆文化―「異性愛」表象にみる越境する／した人々と語られる韓国イメージ―」

金貞仙（梨花女子大学大学院博士後期課程）「トランスナショナル共同体をつくる―韓国男性と結婚したフィリピン女性たちのre-homing」

7月25日

▽Session 4　韓国・日本・アメリカの歴史的／文化的関係に対する女性主義的介入

高橋裕子（津田塾大学）「津田梅子と東アジアのジェンダー表象―津田梅子が執筆した津田仙の訪朝記を中心に」

竹村和子（お茶の水女子大学）・内堀奈保子（お茶の水女子大学大学院博士後期課程）「「新しき」共同体とジェンダー／セクシュアリティ―トランスパシフィック・テクスチュアリティ」

権恩善（韓国芸術総合大学）「〈清燕〉：新女性の表象における民族主義とフェミニズムの葛藤」

慎芝英（梨花女子大学）「韓国現代絵画の日本色とジェンダー：千鏡子の場合」

7．挿絵研究会

①趣旨：江戸時代になって開花した出版文化の中で、挿絵に関する研究を推進する。どのような場面を挿絵化したか、ということだけでなく、挿絵の構図、配置されている人物の衣服及びその文様・髪型、それに家屋、道具類、植物などを理解し分析する。文字通り挿絵を読み解く作業を行っている。前年度に引き続き、西鶴の浮世草子『懐硯』を対象としている。

②プロジェクト担当者（センター研究委員）：市古夏生

③学内研究員：

吉村佳子（生活科学部助教授）

客員研究員：

ダニエル・ストリューヴ（パリ第7大学）

学内協力員：

藤川玲満（博士後期課程・国際日本学専攻）
山名順子（博士後期課程・国際日本学専攻）
伊永陽子（博士後期課程・国際日本学専攻）
森暁子（博士後期課程・国際日本学専攻）
黄韻如（博士後期課程・国際日本学専攻）
趙賢廷（博士後期課程・国際日本学専攻）
沖本清美（博士後期課程・国際日本学専攻）
渡邊さやか（博士後期課程・国際日本学専攻）
武市香奈（博士前期課程・人文学専攻）
宮崎祐美（博士前期課程・人文学専攻）
厳海断（博士前期課程・人文学専攻）

④活動経過：

2005年

第4回　12月21日　『懐硯』巻2の1

2006年

第5回　1月25日『懐硯』巻2の3
第6回　5月12日『懐硯』巻2の4
第7回　5月31日『懐硯』巻2の5

第８回　６月28日『懐硯』巻３の１
第９回　７月26日『懐硯』巻３の２
第10回　10月25日『懐硯』巻３の３
第11回　11月28日『懐硯』巻３の４

８．日本型経済システムの比較史的研究

①趣旨：本研究会は17年度の継続研究である。研究会設立の趣旨は以下の通り。日本がアジア世界のなかでいち早く西洋型経済システムを取り入れた国として、近代化に成功した事例に挙げられることが多いが、近年では、平成不況のなかで、日本型経済システムの限界が指摘され、構造改革の必要性が叫ばれる昨今、日本型経済システムの再検討が必要となってきた。とくに、経済のグローバル・スタンダードは日本が長期経済停滞に10数年を要している中で、先進諸国ではアングロサクソン流の市場原理主義が主流になっており、もはや日本型経済システムは不適切であるという主張さえきかれた。しかし果たしてどうであろうか。

米ソ冷戦の危機が終焉すると世界経済は中国、アセアン、インドなど巨大なアジア諸国を取りこんだグローローバルな展開を始めた。もはやグローバル・スタンダードをアングロサクソン流の思想だけで語ることに無理が生じているのではないか。するとアジアの中でいち早く経済発展を遂げた日本型経済システムの生成、発展の過程を精査、研究することが、大きな意味をもってくる。そこでグローバル・スタンダードそのものを相対化しつつ、日本型システムの特質を明らかにすることにより今日的意味を再考することが必要と考えた。

とくに資本市場の発達が経済発展にとってキイワードになることから、研究スタッフに日本銀行から中島毅氏を客員教授に迎え学内、および学外の研究員で研究連携をはかっている。

②プロジェクト担当者（センター研究委員）：小風秀雅

③学内研究員：
中島毅（センター客員教授）
篠塚英子（代表代理）
三浦徹
新井由紀夫

客員研究員：
坂井素思（放送大学教授）

学内協力員：
永沢裕美子〈博士前期課程、18年度修了〉および関連学内大学院生若干名

④活動経過：

研究報告発表会
2007年３月13日（火）15：00～17：00
研究報告発表会を行う予定である。
学内外の参加可能。会場未定。
報告１　報告者　中島　毅（本センター客員教授：日本銀行金融研究所参事）
テーマ『Tessa Morris-Suzuki「日本の経済思想」について』

国、時代による経済思想の違いは相対的なものに過ぎず、従って、「日本の経済学」なるものを摘出することは不可能であり、逆に、移植された「西洋の経済学」であっても、それが日本経済が要求するものでなければ定着をみることはなかった。本報告では、徳川期から現代に至る多様な経済思想を、経済環境、先行する学問的伝統および社会に占める思想家の立場からの影響を明らかにしながら分析のうえ、新たな日本経済思想史像の構築を試みた外国人研究者による単独の通史研究を紹介する。文献　1989年にオクスフォード大学日産日本研究所の「日本研究シリーズ」の１冊“A History of Japanese Economic Thought”（「日本の経済思想」藤井隆至訳、岩波書店刊、1991年）

報告２．報告者　坂井素思（放送大学教授）
テーマ『コーヒー消費と日本型消費システム』

日本人のコーヒー消費の導入から、第二次世

界大戦以前までの日本人のコーヒー消費について、統計を見ながら説明し、さらに日本人の消費経済システムが存在するのかについて問題提起をする。

9．日本における中国文論の受容

①趣旨：日本においては中国の文学作品のみならず、その周辺にあるテクスト（詩話・文論等）をも広く受容しその影響を蒙ってきた。本研究ではこのことに関する具体的様相を探る。

②プロジェクト担当者（センター研究委員）：和田英信

③客員研究員（学外の大学教員等）：

浅見洋二（大阪大学大学院助教授）

乾源俊（大谷大学教授）

川合康三（京都大学大学院教授）

西上勝（山形大学教授）

④活動経過：

７月８日　お茶の水女子大学比較日本学研究センター第８回国際日本学シンポジウム「日中比較詩学の視点」

企画・コーディネイト・司会：和田英信

研究発表：

門脇廣文（大東文化大学教授）「中国詩学における対立する二組の主張」

蔡毅（南山大学教授）「中国における日本漢詩」

川合康三（京都大学教授）「日本の花・中国の花」

７月31日～８月２日　中国詩学研究会

参加：浅見洋二・乾源俊・川合康三・西上勝・和田英信

10. 日本近世芸能に関する総合的研究

①趣旨：日本近世芸能の特徴と意義を多角的視点から検証する。

②プロジェクト担当者（センター研究委員）：神田由築

③提携機関：

日本芸術文化振興会（国立劇場）

④活動経過：

特別講義

12月14日

出演者　鶴澤清二郎師（文楽座）

内容　文楽三味線について

そのほか「歌舞伎の劇場」について研究会を四回実施し、その総括として12月10日に本学にて講演およびシンポジウムを実施した。